

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部
■発行日 2009年4月7日
■連絡先 藤川博樹
〒115-0045 北区赤羽1-48-3-203
有限会社マイクロデザイン内
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編集 中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

No.325

4月行事日程

■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ：5枚（2000字）

小説：10枚（4000字）目安

■締め切り 2009年4月25日（土）

■購読料・年会費 1200円（年）

郵便振替：

00170-1-18290 ふみの会

4月になりましたので、今年度分の
会費1200円の振込をお願いします。



青梅・吉野梅郷（2009/3/7）

◆日の出山に行ってきました。麓にある吉野梅郷が見ごろで相棒がまだ見てないからです。前回が二分咲きで、それから2週間も経ったのもう満開を過ぎたと思ったら、五部咲きとのこと。全山が桃色や白、赤桃色に染まっています。起伏のある山間に植えてあるので、見る角度によって表情が違って見飽きないほどだった。相棒は「水戸の偕楽園や越生（おごせ）梅林よりいいなあ」といつてましたよ。さて、日の出山の方はきのこの土砂降りから一転して燦爛と陽光がさしてくれて美しかったのですが、足元はきのこの雨でぐしゃぐしゃだった。靴もズボンの裾も泥だらけになりました。山から下りて麓の小川で靴とズボンの裾を洗っていたら、目の前でバスに行かれ、1時間待つ羽目になった。

◆斎藤学医師が、小沢代表秘書の逮捕は先月24日の起訴が「幹旋利得」の容疑に触れ得なかつたことで、検察側のミスだったと判断できると書いている（東京新聞）。けれど、それ以前に巨大マスコミは検察側の「容疑者が犯罪を大筋で認めた」という虚偽をリークし続けた。それで世論の趨勢が作られてしまった。斎藤氏が特に許しがたいと言っているのは、堀田力氏のような検察OBがあなたも善意の第三者のようにして、「検察の政治介入などあり得ないことだ」と述べていたことだ。斎藤氏が危ないと思っていたのは、民主党幹事長の、「幹部官僚を政治任用の対象にする」という発信が早すぎたことだ。政権が変わると更迭だったら、死に物狂いで抵抗するのは自明。ぶっちゃけて言えば、自分たちの保身のための逮捕だった。どちらが正しいかは裁判闘争になるにしても、検察側はマスコミの協力援護射撃で小沢代表（民主党）ダメージ作戦を大成功させたね。国民に疑惑さえ持たせれば、もう政治家は弱いもんね。麻生のぼつちやんが憎たらしいほど元氣になってきたし。おまけだけど、斎藤氏は前回の小泉郵政選挙では自民党に投票したそうだよ。その彼が政官癒着で両者の腐敗が進行すると嘆いている。わが県でも、森田某が知事に当選しちゃったけど、「自民党とは関係ない、完全無所属！」と言っておきながら、東京都衆議院選挙区第二支部でしっかり支部長をつとめていた。それで、5年間の企業献金が1億7000万円。各新聞がそれを書いたのは、選挙が終わった30日以降なんだから、きたないね。（ゆ）

英和辞典

中井 豊

日に日に春らしくなってきた。梅が咲いたと思っていると、ネコヤナギが咲き、白木蓮が咲き、桜が咲いた。いずれ、コデマリが咲き、ハナミズキが咲く。職場では退職者が去り、新たな職員が顔を見せる。学校は卒業式、入学試験、合格発表、入学式と慌ただしい。暖かくなると、誰の頭にも新年度の抱負が去来するのではなからうか。

毎年、四月になるとNHKのラジオでも、TVでも語学講座が始まる。三月に発売されるテキストの四月号は、多くの人達の希望を反映し、一年間で最もよく売れることだろう。そして、外国語を学ぶための辞書も。

いつの頃からか、「電子辞書」というものが発売された。一冊の辞書にも満たない分厚さの電子辞書には、一〇冊ほどの辞書の内容がそっくり入っている。百科事典さえ収録されているものがある。ある大型電器店が閉店になる際、私も「カシオ・E Xワード」を買ってみた。『広辞苑・第五版』（岩波書店）、『リーダーズ英

和辞典・第2版』（研究社）、『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店）、『ロングマン現代アメリカ英語辞典』（ピアソン教育社）、『漢字源』（学研）、その他が入っている上に、オプショで辞書を更に増やすことができるタイプのものだ。それで、中国語を勉強している家内のために『中日辞典』と『日中辞典』（いずれも小学館）をインストールした。

何度か電子辞書を使ってみた。しかし、幅広く読むには、何度もスクロールしなければならぬ。面倒なだけでなく、目が疲れる。やはり本の辞書の方が読みやすい。電車内で退屈のぎに見るには電子辞書がよさそうだが、携帯電話と同様、ちょっと重くて滑りやすいので、油断すると落としそうである。

思い起こすと、初めて目にした英和辞典は、家にあった『最新コンサイス英和辞典（新語つき）』（三省堂）で、それは父のものだった。小学低学年の時分で、何に使う本か分からず、石川林四郎編であることだけ記

憶に残った。紙クロース装だったから、一九四七発行のものに違いない。旧制中学を出たあと、旧制高校に進学する経済的な余裕が家になかったため国鉄に就職したらしい父は英語に未練があったようだ。

中学に入って英和辞典が引けるようになると、しばらく父の『コンサイス』を使っていた。平仮名と片仮名の使い方が逆で、今では「リンカーン」は「と印刷される」ところが「りんカーン」という風になっていた。新しいのが欲しくなって買ったのが、一九五九年刊行の『最新コンサイス英和辞典 改訂版』で、ビニール装になっていた。一時は、学生服の両ポケットに『コンサイス』の英和と和英を入れて歩き、気になると直ぐに開いて確かめた。

尾鷲市の中学校へ転校する前後だと思うが、分厚い『研究社 英和大辞典』（研究社）を買った。その頃の三千円というのは現在の一万円位に相当するだろうか。実際、この辞典の最新版（第六版）は一万八千円である。背革装だったので、背革が朽ちて外れてしまい、現在は背革はなのままになっている。他にも革装の辞書を数冊買ったが、いずれも革が

ボロボロになってしまった。革の質が悪いのか、薄すぎるのか、使い続けないといけないのか、原因は分からないが、もう革装の本は御免である。そのような贅沢をした割に、今もって英語の力は大きくなったものではなく、親に申し訳ないことだ。

高校一年生の折り、『デイリーコンサイス英和・和英辞典』（三省堂）を買った。今も手許にあるので奥付を見ると、一九六四年発行の「初版」とあるから、あるいはもつと前に買ったのかも知れない。この頃、『岩波英和辞典 新版』（岩波書店）も買った。いずれも革装だった。『岩波英和辞典 新版』は、N・E・D（オックスフォード英語辞典）を「First hand」に精読し、その精神を誠実に伝えることをモットーとして編集されたという辞書である。が、その真価は私には分からない。また、ちなみに、N・E・Dは確か古座高次の図書室の書庫にあって、興味深く眺めたことを思い出す。言葉の新たな意味が生まれた文献を跡づけながら系統だてた厚重的な辞書である。何でも七十余年を費やして完成したという。十数冊に分かれていて、しかも各冊が10センチメートル近い厚

さだつたと記憶する。

一九六六年に、『最新コンサイス英和辞典 第10版』が刊行された。これは「テキソン合成皮革装」だった。

この版を最後に、『コンサイス』のサイズがひと回り大きくなって現在に至っている。三省堂の営業マンに旧来のサイズのが欲しいと話すと、他にもその在庫を問い合わせる人がいると言っていた。その後、堺の古書店で、新品に近い第10版を手に入れることができた（今は紛失したが）。

その後、中年になってから、比較的新しい『現代英和辞典』（研究社）を買った。これは三人の娘達にも一冊ずつ計四冊まとめて買った。ハンディながら語彙が多く、読書に重宝な辞書だと思ったのである。一冊のものでは、電子辞書にも収められている『リーダーズ英和辞典』が二〇万語程度だったと思うが、当然ながら例文が少ないのが難点だ。さらに、『新コンサイス英和辞典 第2版』を二冊買った。これは枕元などに置きためた。

家内が高校生の頃、その父親に買ってもらったのが『カレッジクラウン英和辞典』（三省堂）だ。奥付に縮刷版第2刷とあり、一九六八年の発

行だから、当時は刷られて間もない辞書の一つだったのであろう。引きやすく、例文が多いので、語感がつかみやすい。これを最近になって私が使っている。用例に足りないものや重複がある気もするが、おおむね親切である。引いた語句には赤鉛筆でアンダーラインを勝手に施しているのには、家内もちよつと驚いた風だった。それで、「供養になる」と言い訳しておいた。旧制中学を経ずに、高等農林（今の三重大学農学部）を戦争のどさくさに卒えた岳父は、あまり英語ができそうに見えなかったから、娘には頑張ってもらいたかったのであろう。

いよいよ新学期の春である。一斉に若葉が芽吹く春は向学心を刺激する。とりとめのない懐旧の念に浸り、自分を追い越してゆく教え子らに感心するだけでなく、英和辞書くらいは活用しなければならぬ。外国語で書かれた本を読む力は辞書を引いた回数と、その際の集中度で決まる。幸か不幸か、辞書を片手に、面倒がらず、じっくりと良い英文を味わおうとする気持ちは変わらない。努力の要らない道楽はないのだから。

沖縄の思い出(21)

多村 喜木子

ショッピングも映画も沖縄でのアルバイトも、自分が興味を持った事やしてみたいと思った事は、進んで一人で行動をして、一人でいること自体を楽しんでいた私だったが、その他のこととなれば、家でも学校でも人に頼るばかりで、また、運良く周りにも恵まれていた私は、そんな甘えた性格に気付くこともなく高校卒業までを過ごした。例えば、初めてアルバイトをしたマクドナルドでは、最初に給与振り込み用の銀行口座を作り、住民票を提出しなくてはならなかったが、父に話すだけで翌日には用意をしてくれたし、煎茶部のキャプテンの仕事は、雑用から文化祭の準備に顧問の先生との連絡まで、ほとんどのことを副キャプテンの友人がしてくれていた。そうやって常に人の助けを借りていたものだから、どのような事にどの程度の労力がかかるのかということも知らず、何をするにもやる前から面倒がついて真剣さが足りないところがあった。

大学に入っても意識の低さは変わることもなく、高校とは全く違う体制に反発を覚えて、初めから投げやりな態度でいた私は、すぐにどうしていいのかわからなくなった。知ったかぶりをしてきちんと説明を聞かなかったため授業の取り方がわからない。高校の友人たちとは別の学部になってしまったため頼る人もいない。親に頼っても何の解決にもならない。それでも授業を自分で組み立てて提出しなくてはならず、表のような用紙を前に焦りと不安でいっぱいになりながら、配られたプリントや小冊子を部屋中に広げて何度も見返しながら記入した。

授業が始まって毎日戸惑いと不安の連続だった。自分の行くべき教室がわからない。席がわからない。せつかく与えられた大学生活だったけれど、大学の個人主義で自由な体制を楽しむ余裕などなく、ただ周りから置いていかれないようにするのみに精一杯だった。

そんな訳で、早くクラス内で頼れ

る友人が欲しかった。内部進学という変な意識さえ捨てれば、教室に馴染みきつていないクラスメートが沢山いるのだから、いくらでも友人は出来たはずだが、なぜか自分から歩み寄っていき、自己紹介などして窮屈な関係から友人を始めるなど想像も出来ず、周りだけがどんどん友人になっていった。

しばらくすると、運良く高校の友人が同じクラスにいることがわかった。高校時代は友人の友人という廊下や教室で会えば挨拶をする程度の関係だったが、新しいクラスで会話が出来るといっただけで周りも自分たちもすっかり友人になったような気がしていた。しかしこの石川智美は私以上の適当人間で、説明会には顔も出さずに私を頼り、口を開けば彼氏やアルバイト先の店長といった男のことはかりで、初めは面白がって聞いていたものの、だんだんと中身の無い話や軽率な言動に嫌気がさしてきて、一緒にいるのが苦痛になってきた。それでもまた一人になる勇気もなく、嫌だなあと思いながら石川智美とダラダラと新学期をスタートさせた。

大学では、よく言えば自由時間、

私にとっては退屈でどうやって過ごしているのかわからない中途半端な空き時間が沢山あった。私の授業の組み立て方が悪かったのか、やたらに授業と授業の間に数時間もの空き時間があり、寮生活なら部屋に帰ることも出来たが、バスで一時間もかかる自宅に帰る事も出来ず、校内の

った。街の本屋にしては二階建てで規模が大きかったが、家族経営らしいゆつたり感と温かさがあった。私は私服にエプロンを着けて、ご主人にレジを習い、奥さんにブックカバーのかけ方を習い、三時になると客が少ない二階のレジに呼ばれてお婆さんが紅茶とお菓子を出してくれた。

そして夕方には子供が帰ってくる。

アルバイト仲間も同じ大学の先輩で気を使う必要もなく、なんとなく家の手伝いをしていくような地味で退屈なアルバイトだったが、私は嫌いではなかった。

想像していた華やかな女子大生とは程遠い冴えない

私の気持ちと新学期だったが、唯一楽しかったのは、高校を卒業する時にスキューバダイビングをしようと呼び合っていた友人と共に入会した

京大の「マリンスノー」というサークルだった。週に一度、大学から離れてずっと北の方にある出町柳駅近



くの「ほんやら洞」という店に集まってミーティングをした。ここは、同志社大学の近くで、ログハウスの入り口にチャシだらけのドアがあり、店内も本や雑誌が散乱していて、いかにも学生向けのゴチャゴチャとした雰囲気の間だった。木曜日の夜になると、先輩たちが一人また一人とやってきて、夕食を取る人、珈琲を飲む人、それぞれが自由に時間を過ごすうちに、いつの間にかミーティングが始まり、そしていつの間にか終わっていた。まだまだ入りたての私は先輩たちの話を聞くばかりで、とても参加していたとは言えないが、定期的に彼らが集まる場所に自分も迎え入れられているということや、二〜三歳しか歳が離れていないのに大人のような雰囲気のカッコイイ先輩が出来て、スキューバダイビングを体験する前から、「マリンスノー」に所属しているだけで心がウキウキするような楽しい気持ちになっていった。

(つづく)

休憩室やベンチで暇を持て余していた。そこで、そんな空き時間を利用してアルバイトをすることにした。大学から歩いて十分ほどの五条通り沿いに、通学で利用しているバス停があり、その近くにあった本屋で週に二〜三回ほど店番をすることにな

楽しき哉、人生

内田幸彦

二十数年にわたって同居している長男夫婦もシンドかる。この際、一度別れて息を抜かせてやろう。と、売り住宅を物色して

たら、一枚のビラが目について現地へ行ってみた。目玉は二〇坪の畑が付いているという条件だった。五十歳を過ぎて、野菜や果物を作りたくなっていた折りだった。

畑は山の斜面を利用した段々畑で、眺めがいい。眼下に岸和田市内が望め、久米田池も拡がっている。これに惚れ込み、家を見ずを買った。入居してみると、前庭が広く、自動車が二台も入る。家の両側は二・五坪の花壇になっていて、気分がユツタリする。街では見られないゆとりがある。

古い友人の一人は、顔を合わせると、

「歳もとってるんだから、並松（旧住所）へ帰って来いよ。死ぬとき位は生まれた所がエエ」と

再々言う。思うに、私のことより、彼自身が淋しいのではないか？

オバハン（家内）は、スーパーが遠く、一人で行けない上、友達もいない。この家に居ても、四六時中テレビと向かい合う生活だから、何かと理由をつけては前の家に行く。寒くなると春まで帰らない。

今まで貧乏だったし、ワンマンで散々苦勞させたから、老後くらいは自由にしたらいい、とお互いに好きな生活をしている。

冬を除いて、目が醒めれば畑に行き、腹が減った時の朝食は格別に美味いから、ビールを飲む時もある。好きな事のし放題——これ以上の幸福はない。

食事が済むと、物を書くか、雑事を片づける。雑事とは、肥料の調査、畑の材料の調達など。でなければ、散歩する。絵は文章ほどに興味はなく、よほど暇でないとい筆は持たない。

物を書いていてフト目を庭にやると色んな珍客が来て楽しませてくれる。昔、縁日などでお社からおみくじを取って来たヤマガラスの他、ウグイス、メジロ、コマドリ、ヤマバトらが、自然の生態を見せてくれ、盗み見は実に楽しい。

二月だったか、朝刊を取りに庭に出て、ヒョウコヒョコ歩いて行くのは猫だとばかり思っている、ひよいと振り向いたのは狸だった。思わず微笑んだ。

去年も今年も、畑の水槽で玉虫が死んでいた。銀色を帯びた濃グリーン、体長三糎くらいのカミキリムシに似た体型で、宝石のように美しい。政界でよく使う「玉虫色の解決」のご本人である。他にも、コガネムシ、カマキリ、バッタなどが死んでいる。どうやら昆虫も水を吞むらしい。誤って転落、水死したのである。生きんがために水を飲もうとし、それが仇になって水死。虫も人間も一寸先は闇なのだ。

ところで、歳の所為で、朝は三時には目が醒める。目が醒めると

寢床でゴロゴロしていられない性分で、起きて何かをする。用事を片づけるとか、物を書くとか……。他人より三時間ほど働いているから、私の人生は他人より長いと言える。若ければ気にも留めないだろうが、この歳になると一日に三時間余計に働けるということとは、貴重な事だと、無駄なく生きていく。

金には縁がなかったが、楽しい人生だった。無一物から商売を始めたから、苦しかった。その反面、一人っ子の有難さで我儘を貫き通し、したい放題に過ごした。さぞや家族は迷惑だったろうが、それも縁のもの。諦めて頂こう。

貧乏が、苦勞がご褒美を与えてくれた。怖い物無しである。弁護士に訴えられても、やくざが乗り込んで来ても、自信がある。何とかなる……、と。お金の代わりに、対応の術を体得したのである。やはり生きていて良かった……。幸福は心の中にある。

パンドラの箱

第二部



藤川博樹

第六章 前沢君がやぐざに脅されたこと

常三が、樽井書房に移籍してから、引き続き前沢君は樽井書房から本の集荷業務を請け負っていた。小さい出版社は取次に納入する本の量も少ないので、取次から集荷に来てくれないし、わずかな量を自分で納品に行くのも効率が悪いのである。それで、樽井書房は本の集荷業務を請け負って、都内の知り合いの小出版数社を回り、本を集荷してトパーン、日販、大洋社などの取次に納品して、いくばくかの手数料を得ていた。樽井書房を立ち上げてまだ売上が少なかった時代に、貴重な現金収入を得ていたのである。自社でも本を發行するようになり、集会での委託販売の量も増えてきて、相対的に本の集荷業務は重要でなくなってきた。それで週二回前沢君をアルバイトに雇って都内を回ってもらっているのである。

前沢君の運転する車は頻繁に入れ代わる。そもそも乗りつぶした中古車を、いつも格安で中古屋から買うので、壊れやすく入れ代わりが激しいのである。ある時、近頃乗っていたバイオレットのワゴン車の前部がつぶれているので、どうしたのだと聞くと、バスにぶつけたという。暑い日で眠くてしょうがないのを我慢して運転していた。気がつく、自分分はハンドルにうつ伏せていて回りに人が集まっている。きよるきよる見回していると、どうやらバスの後部に激突して止まったのだということがわかった。このつぶれたバンをしばらく使っていて、なぜか前沢君にびつたりの印象で運転するのを見ていて違和感が無かった。常三は家の引越しのときにも運送屋に払う金がなくて、このバンで前沢君に十一往復してもらい最後は夜中の一時半になったほどである。

あわてて飛びついて手続きした。「どうしてこんなに安いですか」と聞くと、中古屋の初老の親父は「いやなに、むにゃむにゃ」と言葉をにこした。快調に運転していた配達作業の途中、ある日自分の車をビルの二階から見ると、天板に「おいしい野菜」の文字と、八百屋の電話番号が書いてあったというのである。

また別のある日、前沢君がめずらしくパリッとした服装をして会社に残ったので、どうしたのだと聞くと、服を捨てたのだという。阿佐ヶ谷を歩いていたら、歩道のご真ん中に大きめのバッグが落ちていたので、開いてみると洋服が上下一式入っていた。着てみると自分にびつたりだったという。どうも信じられないような本当の話なのだが、歩いていて道の途中で自分にびつたりの服を捨てたので、そのまま着ているという、本人にしてみればなんとも自然な流れなので、何も疑問に思っていないのだ。まるでダンジョンの中でアイテムをゲットしたというロールプレイング・ゲームそのものの「ノリ」なのである。

このように、前沢君はいつも多くのエピソードを提供してくれるので、常三も何かと話を聞いていて飽きないのだが、それからしばらくして起こったできごとは、なかでも印象に残った。

会社が引けたある日の五時過ぎ、モツ君が一人で会社に残って仕事をしているとき、真つ青な顔をして前沢君が駆け込んできた。左手の小指を突き出し、右手の人指し指を包丁にしてトントン、トントンたたいている。しばらく口がきけないので、モツ君がタイムイングを見計らって問い詰めると、ようやく前沢君は事情を語りだした。

前沢君は、その頃は自分のオートバイで配達業務をしていたのだが、かなり状態の悪い中古のバイクを探し出してきて使っている。金がないので、ブレーキが壊れていて効かないのを修理しないで運転していた。止まるときはエンジンを切って、足で地面をこすって止まれば、ノープロBLEM、問題ないというわけである。

交差点に差しかかって、キキッといつものように足でバイクを止めようとした。その時、前方に走ってい

お使い(2)

瀧本 文彦

たタクシーが急に止まり、後部ドアを開けて中年の角刈りの男が下車した。バイクは急には止まれないものだから、男にぶつかって止まった。ぶつかつたがびたりと止まっているので怪我はしていない。男は、「おれを殺す気か」と怒鳴り、ヘルメットの上からボカスカと前沢君をなぐつた。前沢君はひたすら謝つたが、ふと見ると、男の左手の小指の先が切り落とされて無かつた。動揺して本所の住所と電話番号を男に教えてしまった。前沢君は真つ青になつていまだ興奮醒めやらない様子で、もうアパートに帰れないと落ち込んでいたという。

これが翌日会社に出社した常三がモツ君に聞いた顛末である。

その後、常三が本人から直接聞いた後日譚では、それから一年後に三鷹のアパートをのぞきに行くと、他に借りる人も無いぼろアパートは廃墟と化していて、ドアをこじ開けて部屋に入ると、畳は腐り、ほこりをかぶつたゴミの山は悪臭を発していた。押し入れの中に積んでいた、虫プロ発行の伝説の漫画雑誌『コム』の創刊号から五年分全巻揃っていたバックナンバーだけが無くなつていたという。

健太は体が小さいので四人のおばさん達の影に隠れている。買い物に来たおばさん達の後ろに立っている宮本商店のおばさんが、買い物に来たおばさん達にキャベツや白菜や人参や醤油などを渡していた。そしてお金を受け取つて、

「まいどおおきに」

とお礼を言っている。健太はお金を持たずに来た事が恥ずかしくてならなかつた。泣きたくなつた。歯をくいしばつてこらえた。宮本商店のおばさんが健太のすぐ近くに来た。それでも話しかけてくれない。無視された。お金を持たずに買い物に来ているので嫌っているのだろうと思つた。

三人のおばさんが買い物をするまでお金を払って出て行つた。店のお客は、おばさん一人と健太と二人になつた。健太は勇気を出して宮本商店のおばさんに、

「豆腐二丁と大根一本と葱ください」

と言つた。宮本商店のおばさんは聞こえたはずなのに知らんぷりをしている。健太は自分の声が小さく、それにどもつたように思つた。お客さん一人入つて来た。

「いらつしやいませ」

と景気良く宮本商店のおばさんが声をかけた。健太はもう一度、

「豆腐二丁と大根一本と葱・つけ・で……」

とうつぶわいて言つた。後から来たおばさんに宮本商店のおばさんが話しかけている。健太の方をじろりと見た。

健太は自分の家は貧乏だから、宮本商店のおばさんが冷たい目で此方を見ているのかなと思つた。それとも自分の声が小さいからかとも思つた。後から来たおばさんに話かけている。宮本商店のおばさんがちらつと此方を見て、「じれつたい子ね」と言つたように思つた。健太はだんだん腹が立つてきた。買い物袋を宮本商店のおばさんの顔に投げつけて帰ろうかと思つた。そんなことをしれないと思ひ我慢した。

二人のお客さんが買い物を買ってお金を支払つて帰つた。

「毎度おおきに」

と威勢よくお客さんに宮本商店のおばさんが言つた。店のお客は健太一人になつた。やっと健太に宮本商店のおばさんが近づいて来て、

「何を買うの」

と怒つたような言い方をした。健太は腹立たしさと、悔しさと、惨めさの混じつた声で、

「豆腐二丁と葱と大根一本・つけ・で・下さい」

と健太は勇気を出してやつと言つた。宮本商店のおばさんは、めんどろくさそうに、じれつたい子だねえと言わんばかりに、豆腐を新聞紙に包んだ。健太は新聞紙に包んだ豆腐を受け取り、買い物袋に崩さないよう注意して入れた。宮本商店のおばさんは、

「それから葱と大根ね。はきはき言わなきゃ分らないじゃないの」

と、つつけんどんに言つて、葱と大根一本を豆腐をつぶさないように買い物袋に入れてくれた。

「あのお、付けで買います」

と言つた。宮本商店のおばさんは、

「また付けね」

と言つて冷たい目で健太を見た。健太は買ったぞ！と心の中で叫び店を出た。「毎度おおきに」と言う言葉は聞こえてこなかつた。健太は道路に出ると一目散に、豆腐をつぶさないように、来た時の何倍もの早さで歩いてお母さんの待つている家に向かつた。

家では貧乏故の夫婦喧嘩が耐えな

かった。お母さんはイライラしている日が多くヒステリックだった。イライラした感情をもてあまし、子供に当たる事が多かった。貧乏神の住んでいる家の住人は心が荒んで冷え冷えとしていた。其の分、明るい話題があると、子供達はほっとして心が温かくなるのだった。

ある日のこと、夫婦間にピーンと緊張の張りつめた食事中、いきなりお父さんがお茶碗を土間に投げつけた。土間でガシャンと茶碗の割れる音を聞き、子供達はビクリとし、何故喧嘩が始まったのか理解できず脅えていた。

またある日のこと、お父さんが鉈を振り上げてお母さんを追いかけている姿を見た。お母さんは逃げながら大声を張り上げて抵抗していた。お父さんは気が狂ったように見えた。

このような環境に居た健太はいつの間にか、親の顔色を見て行動するようになった。健太は家庭内に緊張を感じると急に土間や庭を、箒と塵取りを持って掃除を始めた。健太は学校から帰り家に近づくと、今日はお父さんとお母さんの仲が荒んでいないか気にするのだった。

夏休みや冬休みになるとお母さんの兄の大岡謙一郎伯父さんの家に遊びに行った。健太は大好きな汽車に乗れるので楽しみにしていた。汽車で一時間かかった。汽車の中の健太は、小さな旅に心が解放されて、何時までも海や山の景色を見て飽きなかった。時々窓を開けた。紅潮した

顔を風に当てると、汽車の走る速さを感じ楽しかった。トンネルが十二箇所あり、トンネルを抜けると汽車の煙で鼻の穴が黒くなった。トンネルに入ると慌てて窓を閉めるが、煤煙で顔がざらざらして、眼がしょぼつき、鼻の穴が黒くなるのだった。

親戚の家に中学二年生の浩子と言うお姉さんが居た。優しく遊んでくれる浩子姉さんに会えるのが楽しみだった。謙一郎伯父さんは大変盆栽が好きで、庭から屋根の上まで盆栽でいっぱいだった。健太が遊びに行くと嬉しそうに盆栽を見せるのだった。屋根に上がる謙一郎伯父さんの後についておそろおそろ上って、いちめんの盆栽を見たが、健太は興味がわかかなかった。謙一郎伯父さんの嬉しそうな顔を見て健太も楽しくなるのだった。

謙一郎伯父さんはお酒も好きだった。夕食になると日本酒をお猪口で飲んでいた。お酒を飲んでいるときは何時もにこにこしておもしろいお話をしてくれるのだった。徳利のお酒を飲んでしまうと、雅恵おばさんにもう一本と言うのだった。おばさんは、

「これだけにしなあれ」と言いながらお燗して、もう一本出した。

謙一郎伯父さんは元軍人だった。軍馬に跨り、軍服を着て、軍帽を被り、軍靴を履き、軍刀を腰につけた写真を額縁に入れて飾っていた。健太はその写真を見て、軍馬の上から

此方に向けている昔の謙一郎伯父さんは、怖い顔をしているなあと、写真を見るたびに思うのだった。

浩子姉さんは時々、ラジオ番組の「まぼろし探偵」の主題歌を歌っていた。其のころはテレビの無い時代だった。お姉さんの歌を聴いて健太も歌えるようになった。雅恵おばさんは「なれずし」を作るのが得意だった。健太は遊びに行くと、何時も美味い「秋刀魚のなれずし」をいただいた。

雅恵おばさんは猫が大好きだった。左右の眼の色の違う猫を飼っていた。右眼はエメラルド色で左眼はブルーの猫だった。雅恵おばさんは猫を抱いて、「健太、ほれ見てみな。右の眼と左の眼の色がちがうやろ。珍しい猫なんよ」と自慢するのだった。長閑な暖かい家庭だった。何時も二、三日泊まった。帰る日になると帰りたくないなあと思うのだった。長閑で優しい人達に囲まれた暖かい家に、夏休みや冬休みの終わるまで居たいなあと考えた。健太は帰りたくない泣いて暴れたこともある。

健太は自分に閉じこもりがちな、自分の内面を表に出さない、自分の世界を作って、其処に逃避する子供になっていった。健太の住んでいる家屋のように、じめじめとした暗い性格になり、劣等感の強い、それ故に妙なねじれた自己顕示欲の持った人間になった。「健太は偏屈もんや」とお母さんに言われたことがある。無言で反抗的な態度をとるからだ。

ある日のこと、お父さんが近所の人とお母さんに言っていた。

「この子はおとなしくて真面目な子や。この子は絶対にぐれたりしない子や」と……。

健太はこの言葉を聴いて、何を言っているかと、お父さんを蔑視した。高学年になるにつれ、健太の内面では、親に対する反抗心が日に日に膨らんでいった。ぐれてやると思った。外面ではその様な気持ちを隠しておとなしくしていた。毎日親の顔を窺っていた。いつの間にか人の顔を窺って行動する、卑屈な人間になっていた。

——長い間一人の人間について回る根本的な性格は、先ず家庭環境によって作られ、その家庭環境を取り巻く人間関係によって決定的となる。後年、健太はその様に思うのだった。

(おわり)

ルルの旅

④



蒲原 ユミ子

ジーナ一家はまだ緑がのこる広い芝生の上で芸を見せていた。

庭の奥には蔦におおわれた美しい緑の館のホテルがたっている。ジーナたちは時々この館によばれて芸を見せているらしいが、きょうの客はカーキ色の軍服を着た兵士たちだ。戦争が終わったので引き上げていくとちゅうらしい。戦争中の兵士たちはけわしい顔だったのに、今はリラックスした表情でジーナのおどけたダンスを見て笑っている。ルルは、(ああ、ほんとうに戦争が終わったのね)と、しみじみ思った。

青くすんだ空の下、広い庭には野生のリンゴやブルーベリーなどが実をつけている。やわらかい秋の日ざしを受けながら紅葉した葉がはらはら舞っている。こじんまりした緑の館は美しくて絵のようだった。

ショーが終わると、ルルはダンを連れて庭の奥へ行った。こんなきれいな庭は歩かずにはいられない。ルルはうきうきとはずむように進んだ。ダンもタッタタッタと軽快に走っていく。芝生が終わって森に入った。

どつしりした幹の木々がはだかの枝を広げている。地面には枯葉がどつさりつもっている。ルルは雪を踏み分けるように枯葉を踏み分けて歩いた。落葉樹がとぎれると、そこは丘になっていて町が見下ろせた。もう冬も間近だというのにヨモギが新芽をだしているし、ルルの知らない緑の草がたくさん生えている。

ふと見ると、向こうに人の姿が見える。しゃがんで何かしている。ルルは近づいていった。その人はかぶとの形をした青い花の根を掘っている。ルルは、「こんにちは」と声をかけた。その人はぎよつとしたようにルルを見たが、軽くえしやくをしてから、「ここは大切な野草園だから入らないでね」と言った。ルルはびつくりし、「ごめんさい」とあやまって引き返した。

ジーナ一家のディナーは兵士たちといっしょだった。芸がすばらしくて兵士たちが大喜びしたので、司令官が一家をとくべつに招待してくれたのだ。戦争が終わって、みんなほつとして楽しくくつろぎたかったの

かも知れない。まだ日ざしがやわらかくさしているテーブルには、チキンの照り焼きやピザ、色とりどりのフルーツや野菜など、ここ何年も目にしていなかったごちそうが並んでいる。

正面にはおだやかな表情の司令官が満足そうにワインを飲んでいる。そのとなりに冷たい目をした太った男がいる。えりについた星からすると、副司令官かなとルルは思った。兵士たちは三十人くらいだから大きな部隊ではないようだ。もつとたくさんいたのだけれど、死んでしまつてここにいるのは生き残つた幸運な人たちなのかもしれない。今夜はこの館で過ごす最後の夜で、家にもどれる日も近いのか兵士たちは嬉しうだ。

ジーナは食べるのに熱中していたが、ルルはダンのことを思い出していた。ダンが館のうらにある倉庫のくいつながれている。ルルの目が光った。(ダンにおいしいおみやげを持っていつてやらなくちゃあ)ルルはまわりを見ながらすばやくチキンをナプキンにつつんだ。そして、となりのジーナに、「ダンのところへ行ってくるわ」とさきやいてから、そつと大広間から出た。

ルルは正面玄関に向かっていた。玄関の手前に階段があった。美しい曲線の手すりや深い緑色のじゅうたんがしかれている。つい上って行きたくなるような美しい階段だ。ルルは、(ちよつとだけね。ダン、待っていてね)といいわけしてそつと上り始めた。靴底がしつとりすいこまれるようで心地よかつた。

二階は広い廊下の両側に部屋が並んでいた。ドアもりつぱで、ルルはどんな人がとまるんだろうなと思つた。歩き始めた時、とつぜん、「もういらなかつたら!」と子どもの声があった。よく見ると、奥の部屋のドアが少し開いている。ルルは近づいてのぞいてみた。部屋には、青白くやせた少年がいて、側に若い女の召使が立っている。

「もう少し、めしあがつてください。きょうは戦争が終わつたお祝いにチキンを焼いたのですから」
「あいつらがまだここにいるのに、お祝いの物なんか食べたくない」
少年は不きげんそうにまゆをしかめ、ゴホゴホとせきこんだ。ルルが、(もつたいたいことをいう子だなあ)と思つた時だ。
「だれ? そこにいるのは!」
と少年がさげび、またせきこんだ。

渾沌市凡日録 46

霞を喰う女

蒲原直樹

渾沌市黄桜町の主婦、森口民江は最終的にダイエットを成功させたのは足賀沼湖畔にある断食道場でのプログラムだった。厳しい一ヶ月間の減食、ウォーキングとヨーガの組み合わせは彼女の贅肉をいやがおうでも削り取った。体重は七五キロから

五〇キロへと劇的に減り、しかも体力が向上した。民江はこの結果ならプログラム参加費二〇万円は惜しくないと思った。これまで彼女が買ったダイエット食品や運動器具の総額はその十倍以上あったからだ。

民江はプログラムが終わってからも断食道場を離れることが出来なかった。リバウンドが怖かったからだ。他人にも自分にも甘い性格なので、自発的な食と運動の管理は不可能に思えた。せっかく手に入れたスリムボディを手放したくない、民江は家事育児をなおざりにして自宅から車で十五分の断食道場に通い詰めた。

「キャンサーバスターズ沼南断食道場」というその道場は、所長が横領容疑で逮捕されて裁判中だという噂があったが、所長代行の息子が営業

し、かなり繁盛していた。そこに出入りする講師陣の中で、民江が注目している女性講師がいた。年齢不詳だが艶やかなサリーを着て、豊かな長い黒髪を無造作に結びあげた妖艶な美女だった。

「みなさん、信じますか？」羽黒ミリアというその講師は生徒たちに呼びかけた。

「私はこの半年間、食事をとっていません。水と空気と少しの木の实だけで生きています。人間は修行を積むと空気の中から自然エネルギーを摂取して生き延びることが出来るのです。これは中国の道教やインド仏教で昔から知られていたことです。しかし現代日本でこれを実践しているのは私たちだけでしょう」

そう言うから羽黒ミリアは「空気食」理論を語った。西洋栄養学では「人間は食料を直接血肉に変換して生きている」と言うけれどもそれは間違いで、生命体のエネルギーを食物を通じて間接的に取り込んでいるのだ。生命のない合成食品こそが万病のもとで、そんなものは食べな

い方がましである。修行を積めば食品からでなく、直接大気宇宙のエネルギーを摂取することができるようになる。事実、インドには食物を一切採らずに何年も生きている修行者が存在する、というのだ。民江にはそんなことは信じられなかったが、話の内容はすごく魅力的だと思った。「近く、私たちはそれを公開の場で証明してみせます。楽しみにお待ちください」

羽黒ミリアはそう言って話を終えたが、それはやがて現実になった。複数の週刊誌が『渾沌市で公開断食実験!』という記事を掲載したのだ。『インドで断食修行し、導師レベルの超能力を獲得したとする羽黒ミリア氏(45)が自らの能力を証明しようとして渾沌駅前で公開実験』というサブコピーがついていた。森口民江は本屋で記事を立ち読みした。

記事によると欧米ではこうした断食行をイネディアと呼び、行者をブリーサリアンと呼ぶ。二〇世紀末、オーストラリアでエレン・グレーブという女性が公開実験をして失敗し

たことがあり、羽黒ミリアはそのリベンジを主張しているらしい。それゆえにこのイベントは国際的にも注目されているというのだ。民江は問題の大きさに驚いた。そして羽黒メイサの実験が成功するとは思えなかったが、一方でぜひ成功してほしい、という気持ちにもなった。

公開実験の初日、会場となる混沌鷹島屋ビル七階イベント広場は報道陣でごった返した。その中にはオーストラリア公共放送SBS始め複数の海外メディアも含まれていた。断食道場の主なメンバーは招待されていたが、下っ端の森口民江は廊下のモニターで見ると見ることが出来なかった。

会場の中央に高い壇が造られ、そこに四角いアクリルの仕切りが建てられている。中には絨毯とクッションが敷き詰められ、三人の男女が座っていた。真中に羽黒ミリア、左に高弟の女性、右に男性で、三人ともインド風の衣装だった。実験に先立って質疑応答があり、記者たちがいろいろな質問をした。その中で、「エレン・グレーブは『街中では空気が悪くてうまく行かない』と言って場所を移動させましたが、羽黒さんはどうですか?』というのがあった。それにミリアは、

「低レベルの修行者だと場所を選びますが、私のクラスになりますと場所の空気を変えられますから、どこでもかまいません」と自信たっぷりコメントをした。

会場に用意されるのはペットボトルの水だけ。アクリル仕切りの出入り口は一つ、簡易トイレが一ヶ所ある。被験者は起きている間は座禅を組み、夜は横になってもかまわない。審判団が交代で見張り、毎日医師が健康状態を検査する。一ヶ月通して検査をクリアすれば実験成功だ。こうして注目の実験はスタートした。

「それみたことか」と騒ぎたてた。羽黒ミリア側からは、「男性は体調不良を押しつけて実験に参加しており、その無理がたたったのだ」というコメントが発表された。しかしその三日後、つまり実験十日目には女性の高弟が倒れた。こちらも病院に運ばれ、そのまま入院した。羽黒ミリアは今度はコメントしなかったが関係者には、「まったく、未熟者ばかりで困っちゃう」と語っていたらしい。

前の午前五時のこともあった。夜の会場は照明を落としているのでよく見えない。それでもミリアの影が薄くなってしまふのが分かった。まったく消えてしまうわけではないことが謎だった。だが、なんとなく民江の頭にピンとくるものがあった。彼女は夜の夜、家族が寝静まった頃に車を動かして断食道場へ向かった。

同じように手渡し、ミリアはそれも飲んだ。そして飲み終わるとまた元のような影になり、次第に薄くなって消えてしまった。

民江は今見たものが信じられず呆然としていたが、鉛色の空からポツリポツリと雨が降ってきたのに気づいて我に帰った。彼女は車に戻り、寝静まった我が家の夫婦の部屋に帰って、何も知らずに軒をかいている夫の隣りに横になった。

それからさらに二週間が経ち、公開断食実験は大成功のうちに幕を閉じた。まだ疑問を持つ識者はたくさんいるものの、羽黒ミリアは各メディアに引張りだこになった。彼女の名前は一気に世界的なものになった。

しかし森口民江は知っていた。羽黒ミリアの超能力はブリーサリアンとしてのものではなく、もともと違う得体のしれない能力なのだということを。民江にしてみると、「霞を食べるで生きる」能力よりも、同じ時間に別の場所に現れるテレポーテーションなり「ドッペルゲンガー能力」の方がずっと神秘的なのだった。考えてみるとそれは「人間を超えすぎている」から秘密なのかもしれない、と彼女は思った。

「ネット中継を見ていると、画面から数分間ミリアの姿が消える時がある」というのだ。複数のブログでその噂を読んだ森口民江はパソコンを起動し、中継サイトの録画データを早送りして調べた。すると毎日ではないが、確かに夜中の数分間ミリアの影が見えなくなる事があった。それは午前三時のこともあり、夜明け

「ネット中継を見ていると、画面から数分間ミリアの姿が消える時がある」というのだ。複数のブログでその噂を読んだ森口民江はパソコンを起動し、中継サイトの録画データを早送りして調べた。すると毎日ではないが、確かに夜中の数分間ミリアの影が見えなくなる事があった。それは午前三時のこともあり、夜明け

「ネット中継を見ていると、画面から数分間ミリアの姿が消える時がある」というのだ。複数のブログでその噂を読んだ森口民江はパソコンを起動し、中継サイトの録画データを早送りして調べた。すると毎日ではないが、確かに夜中の数分間ミリアの影が見えなくなる事があった。それは午前三時のこともあり、夜明け

わたしの大学生活 (21)

ふじみちよ

台湾に行ってきました(一)

外国語学部生なのに海外経験がないことに引け目を感じ続けて2年。お金がないからとチャンス逃してきたわたしにもようやく追い風が吹いた。昨年末に出場した中国語スピーチ大会で優勝し、副賞として1週間の台湾研修旅行に招待していただいたのだ。タダで台湾に行ける！ 初海外だ！と喜ぶわたしに、めでたいが外国は心配、と母は複雑そうだった。しかし、父の行って来いの一言で決着。3月上旬わたしは初めて日本を離れた。

この研修旅行はスピーチ大会各地区優勝者と、他の団体の推薦者で構成される合計10名の日本大学生が、台湾政府関係の団体を表敬訪問した後、台湾大学生と交流するなどして、台湾という「国」を

より良く理解することを目的としている。

この目的に叶い、わたしは台湾



をより良く理解して帰国した。それどころか台湾を大好きになって帰ってくる事ができた。

初日は表敬訪問からスタート。日台交流協会へ。実は、日本は台

湾と国交をしていない。(実は、なんて書いちゃって恥知らずなわたし。ご勘弁を……) それにも関わらず台湾と日本の関係が密に感じられるのは、政府や他の分野の方々によって運営されている、この交流協会なるものが、政府に変わって「国交」をしているからである。

たその団体は、国家のために自己犠牲の精神を養う、ポーンスカウト風の団体だ。しかしそのフィードは幅広く、旅行社を運営したり、人々のところを救済するためホットラインを設置したり、全国の教職員のために講習会を開いたりもしている。日本ではこのような大規模な団体の存在を聞いたことがないので、わたしはひどく感動してしまった。

台湾外交部では現在の台湾について、ナンバー2の方から話を伺った。昨年夏に就任した台湾の新大統領は、親日であると教えていただいた。

その台湾外交部でひとつ驚くべきことがあった。到着してすぐ一人の日本大学生が体調を崩したのだが、医務室にすぐに案内され、なんとナンバー2の方が診断の通訳をくださったのだ。日本でいう外務次官さんである。

台湾に到着して2日め。台湾の人たちの温かさ・フレンドリーさをひしひしと感じ始めていた。

(つづく)

ちなみに今年は台日交流年に設定されているそうだ。双方の旅行者が今年が増えることだろう。翌日は救国団へ。旅行中の宿泊施設を全面的に提供してください